

# 商品のバックグラウンドを 想像する

和坂友利江

大阪市立大学 CHOVORA!! 代表

生産者は生産者の、消費者には消費者の「物語」がある。消費者が商品づくりの一部に加わることで両者の「物語」が交錯するとき、従来の消費活動を越えられる。フェアトレードは、その可能性を秘めている。

## CHOVORA!!でフェアトレード

買い物をするためにモノを選ぶとき、人は何を基準にするのだろうか。値段、品質、デザイン、有用性、流行り……さまざまな基準がわたしたちの選ぶという行動に作用しているわけだが、その基準に、商品のバックグラウンドを加えてみるのはどうだろうか。わたしがサークル活動をおして広めているフェアトレードとは、その商品を作った人びと、いわゆる商品の裏側にいる人びとの暮らしを応援する取り組みである。

わたしは大阪市立大学のCHOVORA!!というサークルに所属している。CHOVORA!!とは「ちょっとしたボランティア」の略で、環境保護と国際協力の推進を目的に、ボランティア活動に仲間と一緒に参加したり、イベントをおした啓発活動をおこなっている。サークルのなかにはさまざまな活動をおこなういくつかのチームにわかれており、わたしはフェアトレードチームの一員だ。ここでは、フェ

アトレードチームの活動のひとつである、まちチョコプロジェクトを紹介するとともに、わたしのフェアトレードに対する考えを述べたい。

### まちチョコプロジェクト

まちチョコプロジェクトとは、フェアトレード商品のひとつであるチョコレートのパッケージデザインを大学周辺地域の人びとから募集し、できあがったオリジナルパッケージのチョコレートを今度は大卒周辺のカフェなどで販売してもらう取り組みである。全国の大学にあるフェアトレード団体がこのプロジェクトをおこなっている。わたしたちは昨年からのプロジェクトに取り組んでいる。

きっかけは、CHOVORA!!と地域の人びとの交流を利用して、フェアトレードをもっと多くの人に知ってもらえるかもしれないと思ったからである。まちチョコプロジェクトを毎年おこなうことに白そうなことは人の関心を引き、人と人とのつながりの力をおして自然と広まっていく。それが「フェアトレード」であるためにわたしたちは活動を続けていきたい。強制することなく、これを広めていけたら素敵だと思う。今年も八月から九月にかけて九店舗と小学校二校でパッケージデザインを募集し、一月より大学がある住吉区のカフェなど計六店舗でオリジナルチョコレートを販売する。

### 発想の転換

フェアトレードには課題もある。日本ではまだまだ認知度が低く、フェアトレードの恩恵を受けている生産者は一握りにすぎない。それでもわたしはこれとかかわっていきたいと思うし、広めていくべきだと思う。フェアトレード商品が他と違うのは、生産者のことを考えているところだ。今までそれほどクローズアップされてこなかった、生産者という人びとが今こうして注目されてきている。わたしたちは、目の前にある商品が誰かの努力の結晶であるということをお忘れがちである。フェアトレードを理解しるとか、商品を買うべきだということではない。安さの裏には誰かの苦悩が潜むことを想像する。これを作ってくれた人は幸せに暮らしているのかなと想像する。少し想像してみるだけでモノの見方はガラッと変わる。そんな、商品のバックグラウンドを想像することの意義をフェアトレードは伝えてくれている気がする。いつかフェアトレード商品というモノが、人びとにとって当たり前前の選択肢のひとつになればいいと思う。

よって、このチョコレートが地域の人びとに愛されるチョコレートになり、それによってフェアトレードも徐々に日常に浸透していけばいいというのが、わたしのまちチョコプロジェクトにかける願いである。昨年度は苦悩の連続だった。すんなりいくと思っていた交渉もなかなかうまくいかなかった。フェアトレードのどの部分をおしていけばいいのか、お客さんにこのプロジェクトをなんて伝えたいのか、お客さんの募集用紙でデザインが果たして集まるのか……など各店舗とのやり取りのなかでたくさん疑問が浮上した。それによって、自分たちの計画の詰めめ甘さを痛感するとともに、もっと自分たちもフェアトレードについて深く学ぶ必要があると思った。でもこうして厳しくも温かい地域の人びとのおかげで、今年もこのプロジェクトをおこなうことができているし、昨年の反省点を今年ではできるだけ改善していきたいと思っている。

二年目に突入した今思うことは、地域の人びとの存在や地域の人同士のつながりの力というのはとても大きいということである。カフェの店長さんが「いろんな人に声かけとくね」と言ってくれたり、まったく面識のなかったお店の方が「うちの店にも置きたい」と連絡をくれたり。ただ大学内で活動するだけではかかわることのなかった人たちとこのプロジェクトをおしてつながり、そのことによってフェアトレードがいつの間にか広がっていく。そう思えば、わたしたちが目指している「フェアトレードを広める」ことは、目標というよりは結果であればいい商品そのものが気に入れば、フェアトレード商品であるろうとなかろうとそれを買いたくなるように、面



ゴミ拾い活動 (CHOVORA!!の活動の一環)

集まったパッケージデザイン (一部)



昨年度のまちチョコパッケージ



カフェで販売しました



地域の子どもたちにチョコのパッケージを描いてもらう